

力を促進するような資料室、アーカイブズに関する大学全体の期待など様々な点で、七年後に百周年を迎える本学にとって多くの示唆を与えていると思われた。

近畿大学を巡る史資料 10

『近大生活』

経営学部教授

建学史料室研究員 稲葉 浩幸

本学の歴史に関する史資料として今回紹介するのは、昭和二十九（一九五四）年に発行された永井次勝編『近大生活』である。『近大生活』は現代思潮社の『大学生生活シリーズ』のひとつとして出版され、当時の価格にして二百円で販売されていた。この『大学生生活シリーズ』はほかに『東大生活』『慶大生活』『早大生活』など二十一冊が既刊となっていたが、『近大生活』以外はすべて関東地方の大学であった。（資料1参照）

当時、本学教授であった永井次勝は、本書の序文において、自身のことを「昭和十三年当時の大専教授となり、戦後しばらく退いていたが、昭和二十五年半ばから再び近大に入ったもので、近大では相当古い関係を持ち、近大の発展を目のあたりに見て来た一人である」と述べている。『近大生活』の主な内容構成は次の通りである。

序文

第一篇

- 一、学園生活点描
- 二、大学界隈

- 三、近大の歴史的環境

- 四、近大正章と梅

第二篇

- 一、近大と世耕総長

第三篇

- 一、主要幹部教職員プロフィール

第四篇

- 一、学園概況

- 二、研究機関

- 三、附属学校

第五篇

- 一、外国留学生招聘制度

- 二、就職問題

- 三、校友会活動

- 四、自治会活動概況

資料篇

- 一、近畿大学役職員一覧

- 二、近畿大学教授一覧

- 三、近畿大学学則（抄）

口絵

- 四、校歌、応援歌

本書の序文によれば、「この編纂の基本方針として、徒らに学園生活を美化修飾することを避け、赤裸々な面をさらけ出し、読者に近大の価値を批判して貰うことを企てた」としている。さらに、「大学生生活の四年間は、永いようで短く、短いようで永い。若い人々が社会の実生活に入る前の四年間である。その学園は、学園という観念から印象づけられる気むずかしい雰囲気ばかりでなく、また学者というものの生活は、

融通の利かない、超社会的な或は偏執的な、もしくは孤高を楽しむような人ばかりでなく、それは一面において市井の生活におけるユーモレスクもあり、教授とは学園以外の生活においては庶民的生活を送るものに過ぎないという面を多く描寫し、大学と社会のくさびとしたい」とあるように、当時の近畿大学について大学の概要だけに留まらず、大学生活から教職員のプロフィールに至るまで自己観察を交えながら様々な観点で紹介されている。

その一例として、「第四篇 四、附属設備」の中の「2 映画教室」を抜粋してみる。この「映画教室」について、永井は次のように説明している。

視学教育を主唱した世耕総長の創意による近大の映画教室は、設備の完備したものであるが、この映画教室は学問研究の上においても百聞は一見に如かずの見地から、教室における聴覚教育ばかりでなく、その学理を一つのスト

リーに織り込んで視覚から教え、研究させるために用いられるのみならず、更に学生の情操教育の一端として、内外の名画を一週二回ずつ映寫している。

更に土曜日の午後、日曜日は学外附近の人々に実費を以て公開しているが、近大映画として人気を博すにいたっている。これも大学と学外の人々との親しみをたもち、大学の社会活動の一つとしているわけである。

大学において制作した学術映画として特に注目されているのは新刑事訴訟法を平易に、物語の中に解説した映寫時間三時間半にわたる長尺ものである。その他『津浪』等も優秀な作品として知られている。

実はこの「映画教室」にはおまけがある。

それは「第一篇 一、学園生活点描」の「6 映画教室と娘と老婆」である。もとは大阪市内に住んでおり、現在は近畿大学の隣に暮らす老女と、それを訪ねてきた娘の会話で



『近大生活』表紙



資料1『近大生活』奥付の裏より

ある。このあたりは映画館が遠いから大変でしょうが、たまには映画でも見てはどうかと茶化す娘に、「それがなア、近大にも活動寫真館出来よりましたンやがなア」と答える老女。さらに近大では土曜の午後と日曜に映画が観られると老女が説明すると、

若い娘「ほんなら今日も観られまんの？」

老婆「そうやな、せっかくあんた来てくれはったンやさかい、今日は近大の活動でも案内しまひよか」

若い娘「そんなンやったら、入場料高うおまんねんやろ？」

老婆「大人は三十五円だんね」

と続いていく。当時の映画館の入場料が大人で百三十円だったことを考えると、この三十五円という値段は破格であり、実費で公開しているというのも頷ける。

当時としては大学の教室に映像機器を配備している例はまだ珍しく、この近大の「映画教室」の設置が世耕総長による画期的なアイデアであるとともに、地元根付いた大学として現在にまでつながる地域貢献の一例ともいえる。

また、「第二篇 一、近大と世耕総長」では世耕弘一総長による「3 学生への愛情」として次のようなエ

ピソードが紹介されている。

昭和十九年（一九四四年）の夏、太平洋戦争が熾烈さを極め、日本国内が軍部の一億総決起のスローガンの下に生活を強いられる中、他の大学と同様、本校の学生も軍需工場への勤労奉仕として名古屋まで出勤を命じられていた。学生たちに面会するために名古屋へと向かった世耕総長は、寄宿先から工場まで多くが狭隘な道路で、また万が一爆撃を受けたら避難する場所すらない危険極まりない道程であることを知って、すぐに軍当局へと出向いた。学生が工場へと向かう際に、安全な道路を迂回するためのトラックの配備を要請する総長に対し、軍当局は「危険にさらされているのは、学生勤労隊員ばかりじゃない。しかも、各方面から出勤している学生に対し、貴校にだけそんな方法はとれないし、また実際問題として猫の手でも借りたい今日、トラックを廻して上げたくとも、そんな余裕はない」「それがいけなかったら、本省に交渉されればよからう」と威圧した。けれども世耕総長は軍の威圧に屈することなく、ただちに東條英機との面会に臨み、再び情理を尽くして交渉した。国家の大事のために諦めてもらうほかないと断る東條に対し、世耕総長は一步も引かない。

世耕「だが、あのように明白に危険の予知される状態を、そ

のまま看過するということには、私は校長としてできない。そのかぎりこの要求を却けることができぬ」

東條「そんなら勝手にしたらいいじゃないか」

世耕「勝手にしてよいんだつたら、私の方の学生は大阪に引き揚げさせるが、それではないか」

東條「そんな勝手は断じて許さぬ。学徒は国家の命令によって出勤しているんだから、そんな自由はありえない」

世耕「それじゃ、危険を感じるかぎり出勤させないでおう」

東條「国家浮沈の関頭に立つ今日、みだりに軍の統制を紊す振舞があれば、断乎処分するだけだ」

経済学部における 自校学習の取り組み事例報告

経済学部准教授

建学史料室研究員 戴下 信幸

経済学部では、一年次配当の共通教養科目（人間性・社会性科目群…一単位）として、『自校学習』を独立した科目で設置している。この点

もできるだけの安全を図らねばならぬ責任上、私に対する処分は甘んじて受けよう。トラックを配車されて、安全な道を通わさない以上、一人も出勤させぬ」

この世耕総長の言葉に、東條はついに折れた。その後、間もなく陸軍省から名古屋師団にトラックが配備され、工場への往復は安全なルートを通ることとなった。

これもまた世耕総長の「愛」と「和」の近大精神が色濃く表れたエピソードといえる。

『近大生活』にはまさに本学の教育目的のひとつである「人に愛される」ことを実践してきた証が描かれており、近畿大学の歴史を知る上で非常に貴重な史料となっていると同時に、読み物としても興味深い文献なのである。

は、一年次配当必修科目『基礎ゼミ』内カリキュラムとして自校学習を実施している、国際学部（本広報誌二十三号、七一九ページ参照）や経営学部（本広報誌二十四号、十四一十六ページ参照）とは異なる点である。

学部別の「自校学習」プログラム開講状況を見ると、経済学部以外にも文芸学部・法学部・理工学部・薬学部などが、独立した科目として『自